り行く花清く」と「九州男児の誇りだ」との思いいっぱいで、最後の整理を行いました。他県から来ていた兵隊は、夜逃げのごとく去ってゆきました。

八月十八日、軍令「陸甲第一一六号」により壊第一二五〇五部隊に復員が下令され、九月十三日、復員完結、解散、帰郷となりました。

そして九月十四日、満員列車に乗って故郷へ向かいました。部隊長から「戦後の復興のため努力せよ」との言葉がありました。

帰郷してからは産業組合に復職しました。

内地二年の軍隊生活

大分県　広瀬成光

私は大正十四（一九二五）年七月一日、現在の大分県豊後大野市千歳町に生まれました。地元の小学校の高等科を卒業した後、香川県立農事講習所を卒業しました。当時、父は町役場に勤務しており、母は家事はもちろん、我が家の農業にも主として従事していました。それで私もできうる限り余暇を見つけては農業の手伝いを行い、母を助けておりました。

当時は「産めよ、殖やせよ」の時代で、子沢山が奨励、提唱され、我が家でもご多聞にもれず十一人の子供が健在で、国から「多子家庭」として表彰を受けることが出来ました。大分県では我が一軒のみでした。

徴兵検査は昭和十七年で、甲種合格となり、翌十八年四月十日に大分の歩兵連隊第七中隊に入隊、

その後、西部第十七部隊に転属となりました。
三カ月の初年兵教育が終わった同年九月に一期の検閲が終了した時点で、下士官候補生の試験を受けることを勧められ、受験の結果、下士官候補生に合格しました。
その後、同年十月、一等兵、翌十九年九月十日、上等兵に進級し、熊本の下士官教育隊に入隊しました。その年の十二月には兵長となり、翌二十年二月十日、伍長に任官任しました。
その後、部隊は鹿児島県薩摩郡に配置され、そこでの勤務となりましたが、ここでの勤務になった折も折り、連日連夜の、米軍機の猛烈な空襲が始まり、度々危険な場面に遭遇することになりました。
来襲した敵機の多くはグラマン戦闘機で、繰り返し繰り返し反転・反復の攻撃で、連続的に機銃弾を我々の陣地に撃ち込んできました。グラマン戦闘機以外には双胴のカーチス戦闘爆撃機でしょうか、それが加わり、その攻撃の激しさと執拗さには、本当に閉口しました。
初年兵時代の訓練や内務班の労苦の話の数々は多く語られていることですが、私は一期の検閲時に匍匐前進をやらされたとき、私は銃を左手で捧げ、右手で力いっぱい漕ぐように前進を続けたのですが、余りにも長い距離でしたので、遂に左肩を脱臼しました。
しかしそれでも銃は離さず、最後まで匍匐前進を完遂したため、この検閲に居合わせた上官の方々から「このことは、兵器美談集に掲載せよ」といわれていたようですが、そのことはどうなったのか、その後のことは不明でした。
またある日の「飯上げ」の時、空腹に耐えかねて盗み食いしたことが見つかり、炊事場の上官から、炊事場の大きなシャモジで散々殴られたことが今でも忘れられません。
さらに初年兵の務めでもありました先輩の靴磨きに因縁をつけられ、靴を首にぶら下げて各内務班巡りをさせられ、万年一等兵にこっぴどく悪態

や罵声を浴びたことがありました。

部隊が九州に移動してからの、ある日のこと、霧島登山が行われ、頂上で「旭日拝礼」をするという行事がありました。そのとき、連隊長は当番兵にたくさんの日本酒を携行させていましたが、山頂で日の出を拝礼した際に、自分たちの周囲の者だけで酒を酌み交わしていたのです。同行の兵士には一滴も飲ませずに終わったことで、連隊長は部隊員からのひんしゅくをかっていました。

これらの苦労話の断片は、六十年も前のことで、今は記憶も薄れ、文字どおり、一つ一つが何のつながりもなく思い出されるこのごろです。

我が家の恵まれた「多子家庭」の十一人の兄弟たちは、今も十人が健在であります。ただ欠けた一人の弟は、下関の要塞重砲兵でした。不幸にも病を併発し、宮崎県の赤江の療養所におりましたが、療養所は空襲で焼け出され、結局、自宅療養を命ぜられたのです。そして終戦後の昭和二十三年、療養の甲斐もなく死亡しました。戦病死の扱いになったことが、せめてもの花向けとなりました。その弟を除いて、国から「多子家庭」として表彰された十人は、現在、健在に暮らしております。